

東洋史研究

第四十五卷 第一號 昭和六十一年六月發行

泰山學派の末裔達

——十二・三世紀山東の學藝について——

高 橋 文 治

- 一、北宋期の鄆州州學
- 二、金朝時代山東の學藝
- 三、元初の東平
- 四、元代の泰安

1

本稿は、金朝時代から元朝初にかけての山東、特に東平・泰安の兩地に於ける學藝を、少ない資料を拾いながら概観することを目的とする。ただ、學藝といっても、本稿はこれを經學史的立場から行なおうとするものではない。特定の學說を細かに考察することは、この時代については今日全く不可能であり、ここに集め得た斷片的な資料も、經學史を構成するにはあまりにも不完全で、また曖昧な記述に過ぎないからである。むしろ本稿は、地域研究の立場から、元初の東平府學に至る山東の學藝を、主に歴史的な連續の上から捉えることを目的とする。そして、その歴史的な連續を暗示し得る細い糸が、題にいう泰山學派に他ならない。

ここにいう泰山學派とは、泰山山麓に書院を開き、子弟を教育しつつ宋學の基礎を築いた孫復（字は明復）、また、その高弟で、本籍に因み徂徠と號した石介（守道）、ならびに、二人の學問を繼承した人々を、『宋元學案』卷二にならって便宜的に謂うものである。結論から先に述べるならば、孫復・石介の學問と傳統は、宋朝の南下後も恐らく山東に残存し、凡そ百二十年の間、幾多の風雪に耐えながら山東の學藝を支えたのである。そして元朝初、この學統は、東平府學で教鞭を執った李昶という人物を以て終焉をむかえることになる。この李昶という人物は、『宋元學案』泰山學案の末尾に泰山續傳として列せられた人達の一人であり、『元史』の傳によれば、父李世弼が孫復の春秋を外家に學んだ人であった。本稿の主な作業は、『學案』の金朝部分を補い、あわせて、李昶當時の山東を、學藝の面から検討してみることなのである。

一 北宋期の鄆州學

後に東平府學となる鄆州學は、北宋の景祐五年（一〇三八）、當時知州を兼任した王曾によって創建されたものである。⁽¹⁾この學校の教學に、孫復・石介等泰山學派が當初から影響力をもったことは、元好問「東平府新學記」（文集卷三十二）の次の記述によってある程度確認することが可能である。

鄆學は舊し。……王沂公曾、相を罷め州に判たり。田二百頃を買い、以て生徒を贍う。富鄭公弼の新學記・及び陳公堯佐の府學題榜在り。劉公攀の郡を領するや、朝に請いて國子監書を得、稽古閣を起ててこれを貯う。學門の左に、沂公祠祭の位有り。春秋二仲、祭るに望日を以てす。魯の兩生、泰山孫明復・徂徠石守道をあわせまつる。

鄆州學は、創建者王曾とともに山東の名儒孫復・石介をあわせ祭ったのであり、そこに、この學校の地域性・教學の傾向が端的に示されていると見て、恐らく大過ない。

この記述については、補足的な説明がなお幾つか必要であらう。

まず王曾。この人物が仁宗朝の重鎮であったことは言うまでもないが、彼はもともと山東人（益都の人）であり、鄆州學に先立って青州州學（益都のそれ）も創建したというから、山東の學藝全體にとって大きな功績のあった人である。したがって、當時、山東を中心に活動を開始した孫復・石介が、彼と深い関わりをもったのはむしろ當然のなりゆきであった。たとえば、石介「泰山書院記」（文集卷十九）は、孫復の交遊を論じて、

今、先生に遊從する貴き者は、故王沂公、

と記述したように、王曾とは筆頭に掲げるべき重要な理解者の一人だったのである。また、石介自身も、「題鄆州學壁」（文集卷九）という文章の中で、

沂公（王曾）の賢、人の及ぶべからず。初め、相を罷め青州を知すや、青のために學を立つ。魏に移るや、魏のために學を立つ。再び相を罷め鄆州を知すや、鄆のために學を立つ。相を罷め、三郡のために三學を建つ。沂公の賢、人の及ぶべからず。……

と述べて、州學の創建者に深い敬意を示したのである。因みに、『宋元學案補遺』は、この王曾を泰山師承として泰山學案の卷頭に置く。王曾が、孫復等の學問と實際にどの程度かわったかは甚だ疑問であり、『補遺』の處置に問題がない譯ではないが、いずれにしても、孫復・石介にとって、彼が、自分達の理想を實現し得る政治力をもった人物の一人であったこと、明らかであろう。泰山學派の人々が鄆州州學とかかわりをもとうとしたとしても、何ら怪しむべき事柄ではなかった。

鄆州州學に、泰山學派の人々が當初から影響力をもったことは、孫復の門人姜潛にかかわる『宋史』の記述によって、ある程度確認し得る。この姜潛は、孫復に春秋を學び、石介にも師事した人であったが、『宋史』卷四百五十八の傳によれば、明州や兗州の録事參軍を務めた後、吳奎に辟されて鄆州教授になったというのである。この鄆州教授が、後に府學となった王曾創建の學校のそれであったこと、論を待たない。また、孫復・石介の門人龔鼎臣も東平で教鞭を執ったこ

と、劉跂⁽²⁾「東原集序」に記述がある。

しかも、開學當初のこの學校に最も深く關與したのは、或いは孫復と石介自身であったかもしれない。石介に「題鄆州學壁」という文章があることはすでに一部引用した通りであるが、彼がもし鄆州學を訪れたとすれば、門人との関わりからいっても、當地の學藝に影響を與えずにはおかなかったであろう。また、孫復にしても、嘉祐二年（一〇五七）に疾を以て家に歿した折に、彼は鄆州須城縣（すなわち東平）に葬られることになるのである。⁽³⁾最晩年の孫復は、國子監直講から殿中丞に至った筈であり、彼がなぜ東平に葬られたか、その間の事情は詳らかでない。ただ、東平が彼にとって、故郷でも、任官の地でも、また終焉の地でもなかったこと、並びに、彼が後に王曾とともに州學に祭られるに至ったことを考慮するならば、この背景に、當地に於ける彼の、郷里ゆかりの名儒としての特殊な位置が深く關與したことは、大いに豫想される所であろう。孫復・石介の講習した泰安（當時の奉符）は、そもそも鄆州の鄆州兗州にあった。したがって、彼等の門人の中には東平の人も少なからずいたが、こうした事情によって、孫復が鄆州東平の學藝に直接・間接に關與したことは想像にあまりある。彼が東平に葬られるに至った背景にも、結局は、こうした門人との關係が最も深くからんだのではあるまいか。

そして、王曾創建になるこの學校が國子監書を得る上で、時の知州として盡力した劉摯（莘老）は、已に『宋元學案』の指摘があるように、東平に於いて姜潛に學んだ、やはり泰山學派の徒であった。この人は、朔黨の領袖として、哲宗朝の官界に政治力を有した人であったが、後の紹聖元年（一一〇九四）、やはり鄆州の知州となった梁燾（況之、東平の人）は、姜潛の同窓生として彼と親交のあった人であり、また、生涯を東平に終えた長子劉跂（斯立、號は學易）も、『四庫全書總目提要』「學易集」の條に、

孫復・石介の名と相い埒し、

と記述されたように、やはり泰山學派の徒であった。この劉摯という人物の交遊と家學がいかなるものであったか、明ら

かであろう。元好問「御史張君墓表」(文集卷二十一)は、山東の名士の筆頭に劉摯・劉跂父子を掲げるが、こうした人物が、卒業生として、また郷里の生んだ貴顯として、鄆州州學に多大の影響をもったのである。彼等父子に對する郷里の敬意は、その家學をも恐らく記憶した筈であり、「東學の倡」としての孫復・石介の學は、劉摯の家學として伝えられた部分も、決して少なくなかった筈である。なお、特に劉跂は、學易先生として後の華北に永く記憶され、王惲「紫山先生(胡祇通)易直解序」(文集卷四十三)なども、

宋の名儒劉斯立、學易堂記を作り、但だ序して曰く、「常行を用て事とせば、余を學易と曰わんのみ」と。

と記述した程であつた(劉跂の學がいかにして記憶され、胡紫山が東學といかなるかわりにあつたかは、後に多少觸れる通りである)。

さて、北宋末に至る鄆州州學は、蔡京や新法黨の擡頭により、必ずしも幸福な時代ではなかつたと思われる。その間の様子は、「大觀聖作碑」⁽⁴⁾や「元豐大觀詔書碑」⁽⁵⁾等によつて多少うかがうことが可能であるが、いづれにしても、劉跂・劉跂・劉長福といった劉氏一門・並びに彼等の門人達がなお東平にいた以上、孫復・石介の學は依然として命脈を保つていたと推測される。こうして、鄆州州學はやがて宋朝の南下を迎えることになるが、ただ一つ、ここで附言しておかねばならないのは、劉跂をはじめとする東學の繼承者達が、孫復・石介の學說をどの程度正確に傳えたか、實は多少の疑問の殘る點である。今日我々の知る孫復・石介の學は、その果敢な廢佛論に顯著な特徴の一つがある⁽⁶⁾。しかるに、後の門人の中には、たとえば劉跂が寺記・院記・佛塔記を少なからず殘し、また姜潛の孫が居士を號したように、この點で、先師の說をどの程度繼承したか疑わざるを得ない人が幾人かいるからである。こうした現象の背景を考察することは、資料のない今日極めて困難であるが、師の學說とは本來、時の流れとともに硬直または風化するものであつて、泰山學派の人々にとつても、それは例外ではなかつたというのが、この場合、妥當な答の一つであるかもしれない。むしろ、孫復・石介の學が東學の精神的支柱であり得たのは、二人を越える才能を以後の山東がついに輩出し得なかつたからだといっ

て、決して過言はないだろう。山東は、本稿でとりあげる以後二百年の間、孫復・石介の學以外に、繼承するに足る何者をも持ち得なかつたのである。現實に進行する先師の説の風化にもかかわらず、山東人の誇りとして孫復・石介を回顧し続けたのが、劉跂や、その後の泰山學派の後裔達であつたとすれば、彼等群小學者達が、師の説の様々な部分を置き去りにしたとしても、それは必ずしも不思議な現象でないかもしれない。

二 金朝時代山東の學藝

二一

宋朝が南下した後の華北には、山東・河南を中心に、傀儡政府齊國が誕生することになる。この齊國は、かつて山東に官した劉豫が建てたものであり、一時は東平に國都を置いたこともあつたようだが、その間の東平府學は、元好問「東平府新學記」にいう次の記述以外、知り得ることは何もない。

齊、大名に都するや、學を府署の西南に徙す。賜書・碑石、これに隨いて遷さる。獨り「大觀八行碑」の、蔡京の題して「聖作」と爲すは、預らず。

東平府學は、齊國の混亂の中でも存続されたのであり、蔡京の題書のある「大觀八行碑」という、新法黨の擡頭にかかわる不愉快な記憶は、この時故意に消されたのであつた。

この前後のこともう一つ注目すべきは、東平の生んだ大官劉摯の家系が、宋朝南下の後も、この地に一部殘留したところである。

○ 劉長言

『中州集』卷九諸相の條には、劉長言という人にかかわる次の記述がある。

長言、字は宣叔、東平の人。宋の相華老（劉摯）の孫にして、學易先生斯立（劉跂）の猶子なり。父は蹟。年三十五にして儀眞令に終わる。（蹟は）工詩能文、南榮集の東州に傳わる有り。今、獨り予の家のみこれを有す。

ここにいう劉長言とはすなわち、劉摯の孫であり、劉跂の弟（跂は長子であった）の家系に屬する人であった。この家系が東平府學とどの程度かかわり、家學をどの程度傳え得たかは無論疑問であるが、元好問「東平府新學記」に、鄉國の大家、梁公子美・賈公昌朝・劉公長言の子孫の如きは故より在り。生長見聞して、問學を替えず、尊師重道して、習、以て俗と成る。

とあることからすれば、元朝初に至るまで家系を保ったこと、明らかであろう。元好問が「南榮集」を入手し得たのは、或いはこの家系にかかるものかもしれないが、その類推から謂えば、劉摯「忠肅集」・劉跂「學易集」等の一族ゆかりの書物も、この家系は傳え得た筈である。とすれば、元好問のいう「問學を替えず」や「習、以て俗と成る」といった表現も、あながち美辭のみでなかったかもしれない。因みに、同じく元好問「題學易先生劉斯立詩帖後」（文集卷四十）には、次のような一節がある。

余の家の唐「劉長卿詩」は、學易堂の舊物にして、是れ先生（劉跂）手から校する所の本なり。題して「壬午六月、夏英公・孫儀公の家の本に就きてこれを校す」と云えり。字畫楚楚、唐人の書の盤谷序の如し。また、儀眞令、諱は蹟なる者は、皇統（金の年號）の宰相宣叔の父にして、是れ先生（劉跂）の弟昆の行なり。詩文二冊有り。南榮集と號す。宣叔これを録し、以て遺忘に備う。亂後、ただ余の家のみこれを有す。然れば則ち、余の學易劉氏に於けるや、豈に世の所謂縁熟なる者ならんか。

元好問が入手した學易校本「劉長卿集」は、「南榮集」と同様、劉長言の手を経て東平に傳えられたものだったかもしれない。

なお、劉長言が金朝に仕えるにあたって、范拱なる人物の推薦があったこと、『金史』卷一百五范拱傳に記述がある。

この范拱は、同文に、

范拱、字は清叔、濟南の人。九歳にして能く文を屬し、易學に深し。……劉豫、東平に鎮するや、拱、謁廟の文を撰す。豫、これを奇として深く賞識を加う。……李南・張輔・劉長言は皆拱の薦なり。長言、汝州郟城酒監より省郎に擢せらる。人、その進む所以を知らず。拱もまた自から言わず。……皇統四年、疾を以て退を求む。通議大夫を以て致仕す。齋居讀書して、妻子に對する罕なり。……

と記述するように、やはり山東人であり、易をよくした人であったが、文中にいう劉長言との關係から云えば、彼が「齋居讀書」した書物の中に石介「易解」や劉跂の易學が含まれていた可能性は、決して皆無ではないだろう。

○ 黃久約

次に、劉長言の子孫について多少附言しておく。

今日、彼の直系の子孫として名を残す人はもちろん皆無である。が、劉氏の妹を母にもった人として、唯一黃久約という人が『金史』卷九十六に傳を有する。

黃久約、字は彌大、東平須城の人なり。曾祖孝綽、隱德有り。潛山先生と號す。父は勝、濟州に通判たり。母は劉氏、尙書右丞長言の妹なり。……久約、雋朗敢言、性は友弟たり。文を爲すに典瞻にして、外祖の風有りとなり。

「外祖（劉長言）の風有りとなり」という表現からすれば、この家系にも、劉氏ゆかりの書物は傳えられたかもしれない。なお、黃久約撰述になる文章が、『山左金石志』等に一種残されており、彼の文名と郷土愛の一端を知るよすがとなっている。「節度副使張公神道碑」というその文章は、莒州日照の人張莘の神道碑文であるが、この張氏は、子の張暉・孫の張行簡・行敏など、代々宰相を出した金朝一代の名家でもあった。山東がそうした名家を輩出し得た背後に、郷里の育んだ東學があったという意識は、この文章の行間に恐らくありありと讀みとれるであろう。

次に、北宋末の東平府學に在籍し、孫復・石介の學を傳えた可能性をもつ人物について、多少言及しておきたい。

○ 趙慤・趙瀕

趙瀕という人物は（字は文孺・號は黃山・東平の人）、金朝詩を考える上で極めて重要な人であり、尹無忌・党懷英等とともに、杜詩の祖述を最も早く説いた人である。彼の詩學は、趙秉文を経て元好問に伝えられ、やがて大きく開花するに至るのだが、また書家としても知られ、一時の山東に、党懷英とともに文化的な影響力をもった名士であつた。彼の詩文や經歷は、今日ほとんど傳わらず、『中州集』卷四に詩三十首、金石志や地方志の類に散文四種を残すのみである。また、大定二十二年に進士となり、明昌の末年、禮部郎中に終つたこと程度の經歷を知り得るだけだが、『中州集』の略傳にいう「道を學んで得る有り」という一言を信用するならば、經學にも多少の造詣はあり、或いは、孫復・石介の學を家學とした人だったかもしれない。というのは、『中州集』卷八に列せられる趙慤とは彼の父であり、その略傳に次のようにいうからである。

慤、字は叔通、黃山先生瀕の父なり。宋末、汪彥章、鄆州教官に任ぜらる。叔通學正たりて、嘗て酬唱に預る。故に、その詩文は皆源委あり。國初、登科し、仕えて同知南京路轉運使事に至る。

また、この趙慤・趙瀕父子の學問を暗示する文章として、いくつか極めて重要な碑文がある。が、その碑文を論じるにあたっては、まず王去非・党懷英といった人々、ならびに泰安の學藝について、多少論じておかねばならないだろう。

二二二

泰安は、言うまでもなく、孫復・石介講習の地である。この地に泰山書院が建てられ、多くの門弟を集めたことは、石介「泰山書院記」によって廣く知られる所であるが、その後の書院の消息は意外に傳わっておらず、信賴するに足る最初の記録があらわれるのも、實は金朝に至ってからである。

まず、党懷英「魯兩先生祠堂碑記」（『泰安縣志』卷七等所收）⁽⁸⁾の次の記述を見てみよう。

初、兩先生（孫復・石介）、室を泰山の下に築き、以て學館と爲す。嶽祠（岱廟）を大闢するに屬^{あづか}び、孺基甫めて迫る。乃ち、北のかた山麓に徙^{うつ}す。舊館を以て柏林の地と爲し、歳ごとに施錢を分かちて、養士の費と爲す。學ぶ者は、今に至るもこれに賴る。郷人、指して上書院と以爲るは則ち、その徙す所の地なり。大定の間、嶽祠火かる。越えて明年、詔有りて營建するに、乃ち命じて廟學を更新す。已にして、諸生相い與^{とも}に言いて曰く、「昔者兩先生汶の上に宣學す。汶學はこれを祀りて忘れず。吾儕、その郷に居りてその德を食す。乃ち遂に已むべけんや」と。是に於いて、兩先生の諸孫、その言を聞き、更に有する所を出だし、祠堂を大門の左に作爲り、以て學ぶ者の意を成ぐ。石先生の孫震、その姪の翊をして京師に走らせ、その門婿の党懷英にその本末を書し、將てこれを石に刻まんことを屬さしむ。

……

この文章は、「魯兩先生祠堂」が、泰安縣學の重修にともなつて建立された經緯を記すものである。ここには、いくつか注目すべき事柄が記述されるが、その第一は、やはり何といつても、泰山書院のその後の消息であろう。

泰山書院は、岱廟の擴張にともなつて移轉を餘儀なくされ、名も上書院と改められながら、金朝大定年間に至つてもなお存續されていたのである。無論、この上書院が常に學を講じたとは期待し難いが、それにしても、一私塾たる泰山書院がかくも永く命脈を保ち得たとは、一種驚きでさえある。しかも、當地には石介の子孫も依然血脈を保ち、党懷英の如き名士も一門ゆかりの人だったのである。これらの人々が、石介の著書を傳え、祖先への敬意を保つたこと、言うまでもあるまい。また、文中にいう「汶學」とは、この場合泰安縣學を指すと思われるが、その縣學では、「これを祀りて忘れず」とあるように、以前から孫復・石介を祭っていたのであつて、この時の祠堂建立も、その點からすれば、恐らく重建だつたに違いない。當地の學藝が、二人への敬意を一貫して保ち續けたこと、明らかであらう。泰安は恐らく、東平とともに、二人の著書と學を傳え得た、東學の重要な據點であつた。

なお幾つか補足的な説明をするならば、泰安縣學の重修については、『山左金石志』卷十九・李守純「大定重修宣聖廟

記（大定二十二年）」に次のような記述がある。

泰安の州たるや、嶽祠有りて、以てその中に壯觀たり。岱宗・徂徠・泮汶・漕濟有りて、以てその外を環抱す。これ、周公の封境・孔子の郷國・帝王封禪の所なり。亡宋の開寶五年、乾封縣をここに徙す。大中祥符元年、改めて奉符と曰う。廢齊の阜昌の初、改めて軍と爲し泰安と曰う。本朝開國して六十有八年、これを昇して州と爲す。その縣たるより、孫明復・石守道二先生の山齋の故基を以て建學し、柏林の地を以て養士作成の材に課す。故に常にこれ有り。天下に魁たる者は則ち耿公昌世、翰林に顯たる者は則ち楊公用道⁽¹⁰⁾。これ、その尤も傑出する者なり。惜しいかな、歳久しくして殿宇の壞たること甚し。震風凌雨、聖賢像すら僅かに庇う克^たわず。黌舍顛漏し、學ぶ者の背^まてこれに居る鮮し。有司、出を吝^おしみ、竟にこれを葺かず。また、これを如何ともするなし。

この記述に明らかなように、泰安縣學とはそもそも、泰山書院舊館跡に建てられたものであった。したがって、魯兩先生祠堂も、舊館跡地たる縣學に建立されたのであり、元好問「東遊略記」（文集卷三十四）も次のように記述している。

泰山上書院は、もとは周朴の居る所。宋の泰山孫先生明復、これに居る。州學に魯の兩先生の祠堂有り。党承旨、記を作す。兩先生とは、明復と徂徠石守道なり。

泰安に於ける二つの教育機關・州學と上書院は、ともに「魯兩先生」ゆかりのものであった。當地の學藝は、精神的にも、また教育機關の上でも、文字通り二人を祖としてはじまったのである。党懷英が州學と書院の關係を明記しなかったのは、同地に、この「大定重修宣聖廟碑」が先に立てられていたからであろう（なお、上書院にかかわる元好問の記述は、記憶違い、乃至傳聞の誤りによるものと思われる。元好問が泰安を訪れた一二三六年には、上書院は喪亂を経て、或いは名を残すのみだったのかもしれない）。

また、泰安州學は、大定十八年（一一七八）に嶽廟が火災で焼失した折、嶽廟再建の餘材を以て重修されたものだが（州學は嶽廟の東鄰にあった）、それ以前の縣學は、この記述に明らかなように、荒廢著しく、生徒もほとんどいないといった窮

狀にあった。こうした中で、縣學が學校としてどの程度機能したか甚だ疑問であるが、ただ、金朝に於ける大定年間以前の學校とは、概ねこうした状態にあったのであって、たとえば山東に限っても、文登縣學が大定十二年、章丘が大定十六年、博州（聊城）が大定二十一年、棣州が明昌六年（一一九五）に、それぞれ學舎を再建しているのである。⁽¹¹⁾重修がこの時期に集中しているのは、その事自體、それ以前の學校の荒廢ぶりを端的に物語るが、因みにいえば、山東に冠たる東平府學も、この時期には同様の状況にあったと推察され、党懷英「棣州重修廟學記」（『山左金石志』卷二十）の一部には、次のような記述も見える。

余聞けり。樞（王樞、棣州州學教授）の祖の文正沂公（王曾）、嘗て田を買い、以て鄆學に予^{あた}う。歳久しくして、多くは田畔に侵冒さる。石公（石玠・時の棣州知州）、東平に貳漕たるの日、皆理^{さば}きてこれを學に歸す。諸生、今に至るもこれを徳とす。これより、以て知る有り、石公の力を學校に有^{いた}すは、蓋しその素なりと。

王曾の子孫と石玠（石介とは恐らく無縁⁽¹²⁾）なる人物がともに州學を重修したというから、何か因縁譚めいたことになるが、東平府學もやはり衰退著しく、學舎は「田畔に侵冒」され、生徒さえあまりないといった状態にあったのである。

山東の學校は、このように、この時期深刻な低迷状態にあった。が、それが、山東全體の低調に起因したかといえ、實はそうではない。學藝の低調は、金朝全體にかかる事柄であるから、その意味では山東も例外でないが、むしろ當地は、東學ゆかりの名士が野に存し、それらの人々の交遊・講習によって、學藝に於いて華北に冠たる位置を一貫して保ったと思われる。

元好問「南峯先生墓表」（文集卷二十四）は次のように記述する。

先生、諱は豫、字は彥先、姓は呂氏、懷州（河南省新郷）修武の人。……既に冠して東州（山東）に遊學し、易を以て専門と爲す。經明行修、倫輩に高出し、醇德先生王廣道、特にこれを器重す。

この呂豫が、成人の後山東に遊學したのは、當地が經學（特に易學）に於いて指導的な位置にあったからに他あるまい。

また、同「御史張君墓表」（文集卷二十一）は、山東の禮樂を論じて次のようにも記述する。

……海内、取りて以て法と爲す。その餘の經明行修、晦道商公・醇德王先生より而下、何ぞ一二をもつて數う可けんや。

山東の學藝は、學校の荒廢の中でも、決して衰退した譯ではなかったのである。

そして、山東がもし、經學に於いて華北に冠たる位置を保ち得たとすれば、元好問も記述するように、それは主に、醇德先生王廣道とその周邊の人々の力によるものだったと見て、恐らく大過ない。

二一三

○ 王去非・王去執・王仲元

王去非、字は廣道、東平府平陰の人である。『金史』隱逸傳にその略歴がしるされるが、『山左金石志』卷十九にある党懷英「大金故醇德王先生墓表」がその原資料であること、已に『山左金石志』の案語の指摘する通りである。同文によれば、徽宗卽位の翌年（一一〇一）に生まれ、金の世宗大定二十四年（一一八四）に歿したというから、宋・齊・金三朝にわたる山東の激動を、文字通り身を以て體驗した人であった。一時は科擧に應じたこともあったようだが（恐らく齊の頃）、「合せずして屏去」した後は、郷里平陰で讀書と子弟の教育に一生を終えたようである。死後、門人達がその德を思い、「先生の德、所謂大醇なるものにあらざるか」と論じたことから、「醇德先生」と呼ばれるに至ったという。歐陽修であれば、「先生、隱者にあらず」と記述したのであろう、金朝に於いて孫復の如き役割を果たした人物であった。

党懷英は、同文の中で彼の學問を論じ、次のように記述している。

先生の道、蓋し、韓愈氏・歐陽氏とこれを行なう所以を同じくす。異なる或り。二子は達して顯わる。その力を用いるは易し。故に剛にして以て決す。先生は窮して約し。その力を用いること難し。故に順にして以て化す。

この文章は、石介「泰山書院記」の次の一文を、ただちに想起させるものである。

周以上より觀れば、賢人の達する者、皋陶・傳說・伊尹・呂望・召公・畢公、是なり。周以下よりこれを觀れば、賢人の窮する者、孟子・楊子・文中子・吏部（韓愈）、是なり。然れども、その功業德行を較べれば、窮、必ずしも達に易らず。吏部の後三百年。賢人の窮する者、又た泰山先生（孫復）有り。

つまり党懷英は、韓愈以上に窮した「賢人」として王去非を論じたのである。また彼は、「魯兩先生祠堂記」（前掲）の中で

故に、その（孫復・石介）没するや、歐陽公その墓に誌し、蓋し、これを孟軻・韓愈の流に比す。

とも記述しているが、源流を同じくすれば學問も同様の傾向を有すること、明らかである。党懷英は、「王去非墓表」の中で孫復の名を故意に避けたのであり、それは恐らく、「東學の倡」孫復と王去非とを同一視するためだったのである。その背後には、孫復の高弟であり「泰山書院記」の撰者であつた石介に、自身をなぞらえる意識もはたらいたであろう。また、王去非の一族には錦峯先生王仲元（清卿）という人がいるが、元好問は後に、この王清卿の家で劉跂「學易詩帖」を見ているのであつて、この家系に泰山學派ゆかりの書物が代々少なからず傳えられたこと、充分考えられる。

この詩（劉跂の詩）、余は初め、崧山に到りし時、曾てこれを見る。能くその意を得るもその辭を記す能わず。搜訪すること一十年。北渡の後、まさに太原に還らんとして東郡（山東）を過る。乃ち復た、これを郷人王清卿の家に見る。

（文集卷四十「題學易先生劉斯立詩帖後」）

王去非という人は、党懷英の墓表に、

（王去非に）問うに、釋氏の『戒』『定』『慧』と、道家の『攝生』とを以てする者有り。則ち對えて曰く、「易の『寂然として感通す』と、中庸の『中和』と、詩の『思、邪無し』と、是の若き者、『定』と『慧』とにあらざるか。孔子、顔淵に『視聽言動、非禮を以てする勿れ』と語りしは、『戒』にあらざるか。易の『言語を慎み飲食を節

す』と、孟子の『養心寡欲』とは『攝生』にあらざるか』と。蓋し、未だ嘗て釋老を深く詆^そらざれども、その徒、頗^おもすれば自からその學を棄て、これに歸す。

というように、釋老に對して必ずしも好意的でなかった人のように推察されるが、そうした彼の態度がもし石介に端を發したとするならば、『學易詩帖』のみならず、東學ゆかりの書籍が少なからずこの家系には傳えられた筈である。

この時代は、書物の入手の極めて困難な時代であつた。山東に遊學して王去非に易を學んだのは前掲の呂豫であつたが、元好問も、劉跂の詩帖に再びめぐり合うためには、後の山東旅行を待たねばならなかつたのである。こうした狀況は、反對から言へば、入手し得る書物がその人の學問を規定することを意味し得るであらうが、これが、孫復等の學を山東に残存せしめ、東學を金朝に一家たらしめた背景だつたと見て、大過ないのではあるまいか。たとえば、金朝一代の考證學者として博覽を誇る王若虛も、金朝時代に山東に遊學することがなかつたために、孫復・石介等東學の書を終に目睹することがなかつたと推測される。王若虛という人は、『淳南遺老集』を通觀する限り、所謂「鑿說過正」の人で、讀んだものには批判を加えずにおかぬといつた宋儒的氣質を有した人であつたが（たとへば彼は、熟知した筈のない朱熹に對しても批判を加えている⁽¹³⁾）、その彼が、孫復等について一切論及しなかつたとすれば、それは恐らく、藏書中に彼等の著書が含まれていなかったからに違ひない（それに、王若虛の最も得意としたのは孫復と同様春秋の學でもあつた）。

なお、元好問に「學易詩帖」を傳えた王仲元清卿（號は錦峯）とは、王去非の從弟・榆山先生王去執（明道）の子である。王去執も、王去非と名を等しくした經學者であり、その略傳は、『泰安府志』に趙滄撰述になる墓表の一部が傳わっている。王清卿は、楊奐「錦峯先生墓表」（『元文類』卷五十六）によれば、貞祐四年（一二二六）に已に歿しているから、元好問が訪れた折（恐らくは一二三六年）に二人が會つた筈はない。『中州集』卷八にある王仲元の條は、「子は公茂、今は雲中に在り」と後の消息を記述しているから、その折、王清卿の故居には一族ゆかりの誰かがいたのであらう。また王去非の子は守正・守素という。守道の名が見えないのは、或いは、石介の字の守道を意識してのことかもしれない。

また、王去非の交遊關係にも東學ゆかりの人があったことを多少確認し得るので、次にそれを列挙しておきたい。党懷英は、前掲の墓表の中で次のように記述する。

……是に於いて、進士楊好古、泰山□□李守純の狀と、涿州軍事判官・東平の趙渢所錄の遺事を以て、ここに京師に來たり、鄙文もてこれを墓に表するを屬す。懷英、昔者山東に宦學せし時、東阿の張子羽・荏平の馬定國・奉符の王頤・東平の吳大方とその兄大年・郭弼憲・趙愨・甲公綽の諸公、先生と相い友すること善し。道義を講論し、古今に援據し、孔孟の傳える所を以て諸儒の倡となる。

○ 李守純

先ず、行狀を撰述した李守純。この人は、「大定重修宣聖廟記」（前掲）の撰者である。經歷や學問にかかわることは一切傳わっていないが、「重修宣聖廟記」の文中に、

守純、職は善を主るに在るを以て、敢て淺陋の辭を以てせず。

とあることからすれば、彼が泰安州學の教授であつたこと、恐らく間違いない。また、党懷英がこの人の故郷を泰山とし、るしていることからすれば、或いは、泰安縣學乃至上書院で學を受けた人だったかもしれない。

○ 趙愨・趙渢

また、遺事を撰述した趙渢と父の趙愨。父趙愨が北宋末の東平府學學正であつたこと、已に言及した通りである。この人物は、金朝に至つて博州州學教授になつたと推察され、そのことが『山左金石志』卷十九「博州重修廟學碑」の碑陰記（王遵古撰）に見える。「重修廟學記」を撰述したのは實は王去非その人であり、文中にいう「天眷の間、趙大夫學官と爲る云々」も、恐らくこの人を指すであろう。子の趙渢が王去非の遺事を撰述したのは、父愨の縁であつたかもしれない。

が、もし王去非と父に薰陶を受けたとすれば、この人の得意とする所も、必ずしも詩のみでなかったろう。なお、この趙
胤は、王去非の従弟王去執の墓表の撰者でもあった。この家系は、王氏とよほど深い因縁で結ばれていたのである。

○ 張子羽・馬定國

次に、張子羽と馬定國。この二人は、『中州集』卷一と卷二に、ともに略傳がある。卷二張子羽の條は、馬定國「薺堂
集」が更に引かれ、二人の師友五人の名と詩句が列擧されている。人名のみをここに引くならば、次の五人である。

香巖可道上人。

鮮于可、字は東父、蜀の嘉州の人。

高鯤化、字は圖南、平原の人。

王景微、字は彥美、祁國文獻公溥の後。

吳頴、字は子長、東平の人。文肅公奎の孫。

ここにいう吳頴の祖吳奎とは、かつて鄆州の知州であった折、孫復の高弟姜潛を州學に招いた人でもあった。王去非と交
遊であった東平の吳大方・大年兄弟とは、或いは、この吳頴と無縁でなかったかもしれない。

○ 党懷英

次に墓表の撰者党懷英。この人は、『歸潛志』卷十に、

趙閑閑（秉文）、前輩中に于いて、文ならば則ち党世傑懷英・蔡正甫珪を推す。

と記述されるように、金朝を代表する文章家・詩人の一人である。この人の傳記は、趙秉文「翰林學士承旨文獻党公神道
碑」（文集卷十一）に詳しく、また、「竹溪先生文集（竹溪とは徂徠山中の溪流の名である）」十卷があったこと、趙秉文の引
（文集卷十五）に明らかである。なお、彼の妻が石介の家系に出ることは、趙の神道碑・『中州集』の略傳ともにに記述が
ある。この人については、述べる内容は多々あるが、ここでの敘述は不必要であらう。

墓表に名が見えるその他の人物、楊好古・王頤・郭弼憲・甲公綽については、これを考察する手掛りが今の所全くない。ただ、王去非の再室は甲氏だったというから、甲公綽とは、その一門の人だったのかもしれない。

○ 周馳

また、ここには記述されていないが、王去非の門人に迂齋先生周馳（仲才）という人があったことは、『中州集』巻七の略傳によって知り得る。

周馳、濟南の人、經學は醇德先生王廣道に出ず……

この人は、また、『靈巖寺田園記』（『山左金石志』卷二十）の撰者であったが、この碑石は、書丹は趙渢・篆額は党懷英の手になり、山東に於ける三人の交遊と名聲を偲ぶ⁽¹⁴⁾よすがとして、今も靈巖寺内に現存する。

三 元初の東平

三一

元初、親子ともども東平府學教授となった李世弼・李昶父子が、孫復の『春秋發微』を世弼の外家より得たことは已に述べた。彼等に孫復等の著書を傳え得たのは、以上の論述のように、東平の劉長言・黃久約・趙慤・趙渢・泰安の石氏・党懷英・平陰の王去非・王去執の家系、およびそれぞれの門人達があったのである。李昶の祖母がいかなる家系の人か明らかでないが、李父子が東平の人だったことを考慮するならば、彼等が孫復の著書を手し得たのも決して偶然でなかったことは、確かであろう。彼等はそれを、家學として授けられたのであり、當時讀み得る様々な書物の中から自らが選擇したのではなかったのである。

そして、山東に於ける孫復・石介の傳統は、この李昶を以て幕をとじる。もちろん、それ以前と以後とに、山東の歴史

に越え難い斷絶があるのではない。孫復等の書は一部では傳えられたであらうし、家學は依然残ったであらう。ただ、山東の學藝全體の中でそれらのもつ意味は變つたのであり、また、學問の擔い手それ自體にも少なからぬ變化があつたのである。元初、山東の學藝を特徴付けたものは、東學の傳統の保守ではなく、華北全土からの知識人の流入と、新しい學問の擡頭にあつたのである。

當時、山東の學藝の中心は、言うまでもなく東平にあつた。そして、元初の東平の一つの特徴が科擧への郷愁にあつたこと、⁽¹⁵⁾これも更めて述べるまでもない。たとえば、李昶父子の名をはじめて有名にしたのは、二人が興定二年の科擧で父子及第したことにあつたが、東平に流寓した知識人の多くは彼等と同様金の遺民だったのであり、それらの人々が、自身の階層を決定付けた科擧の復活に意を注いだのは、むしろ當然とも言える事柄であつた。因みに、李世弼が現在に唯一残す文章も、「金登科記序」(王惲『玉堂嘉話』卷五所收)といい、暮年に至るまで進士及第を夢見た彼の執念を偲ばせるものである。

ただ、彼等のこうした科擧への郷愁が、東平に於いて、金の舊風たる「詞賦」の尊重のみをたらしたかといえば、必ずしもそうでない。現に、李世弼・李昶父子は「經義」出身であつたし、「詞賦」の尊重それ自體、已に金末には、數々の論議を呼びながら變質しはじめていたからである。金末の混亂に直面した知識層の危機感は、學問・文學のそれぞれの分野に新しい氣運をもたらした。それは當然科擧の制度にも反映され、「詞賦科」の舊勢力と、⁽¹⁶⁾「經義」「策論」また新しい傾向の「詞賦」を重じる新進の勢力とは、科擧のたびに黨争をくり返したのである。また、東平と淺からぬ關係をもち、この時代の生み得た最大の知識人として有名な元好問でさえ、時に「詞賦」の傳統の體現者の如く論じられることがあるが、彼は、趙秉文と常に黨議をささやかれた、實は新進勢力の一員だったのであり、⁽¹⁷⁾舊勢力の「詞賦科」に批判的であつたばかりか、それとの軋轢に終生悩まされた人でもあつたのである。

○ 李簡・張特立・劉肅

東平に起った新しい學問は、『宋元學案』卷十六に引かれる李簡「學易記序」の次の文章によって、まず最初の胎動を確認することが可能である。

伊川先生、嘗て云わく、「易を學ぶ者は、當に王輔嗣・胡翼之・王介甫三家の文字を見るべし。通貫せしめて、然る後に卻て用心の處を知る」と。時に先生の易傳未だ出でず。溫陵の曾獻之、『大易粹言』を集め世に傳えるに及び、則ち學者、宗とする所あるを知る。しかれども、三家の説、去取する無きにあらず。歲壬寅（一二四二）、予、家を東平に挈^{たづ}える。時に、張中庸（張特立）・劉佚庵（劉肅）二先生、王仲微（？）の輩と方に諸家の易解を聚めてこれを節取す。講席の末に廁^みるを得て、前後數載、凡そ讀むこと六七過、その書始めて成る。然れども、人の見る所は盡くは同じき能わず。その去取の閒も、則ちまた稍や異なる無きにあらず。大抵は、張と王とは意は省文に在り。劉の心を設けるは、務めて一説に歸すなり。僕の取る所、寧ろ失の多くして、以て後來の觀者の去取を俟つ。

この文章の撰者李簡については、同じく『宋元學案』卷十六に、

李簡、字は蒙齋、信都の人。官は泰安州通判、『學易記』九卷を著わす。

と記述されるのみで、詳しい經歷は明らかでない。ただ、楊奐「東遊記」（『還山遺稿』上）に、

壬子（一二五二）の春三月十六日庚子、東平行臺公（嚴忠濟）、予を東園に宴す。……幕府の諸君、…信都の李簡仲敬の若き、…東湖の上に祖^{えん}す。

とあることからすれば、この人の字が蒙齋でなく仲敬であり（蒙齋は齋號）、また、東平行臺公嚴氏の庇護を受け幕下の職にあったこと、間違いないだろう。また、一二四七年頃から一二五一年頃にかけて、一時は張文謙・劉肅とともにフビライのもとで仕事をしたこと、李謙「中書左丞張公神道碑」（『元文類』卷五十八）に記述がある。當時にあっては、宿儒として、劉肅等と名を等しくした人であつたらう。そして、右の文は、この李簡が東平に移居した折、洛州の劉肅・東明の張

特立・王仲徽(?)といった人達がやはり東平につどい、易を講じながら諸家の易解を照合し、それぞれの立場から編輯を行っていたというのである。李簡は明記していないが、『元史』のそれぞれの傳に、張特立「易集說」・劉肅「讀易備忘」があることからすれば、この時まとめられた易解は、三者三様の立場を守ったまま恐らく上梓された筈である。

ここにいう張特立は、華北に於いて最も早く程氏の學に傾倒し、同じく二程の徒であつた李俊民とともに、元初道學の草分けとも謂える役割を果たした人である。彼が、いつ・どこで程氏の書を學んだかは明らかでないが、李簡「學易記序」に、「時に先生の易傳は未だ出でず」という記述がある所からすれば、當時張特立の手許にあつた易解も、恐らくは『大易粹言』の域を出るものでなかつたろう(むしろ『大易粹言』のみの筈である)。この『大易粹言』は、二程・張載・楊時・遊酢等七人の易解を集めたものというから、道學諸家の易解を編輯した俗書であつたろうが、張特立等はこうした書籍をたよりに程氏の學の一端をうかがうと同時に、それを東平の諸生に傳えていたのである。程氏の學とは、無論、それまでの東平が經驗しなかつた新しい學問の息吹なのである(もともと、『元史』張特立傳は「特立、程氏の易に通ず。晩は諸生に教授し、東平の嚴實、毎にこれを加禮す」と記述するから、彼等は後に『程氏易傳』を入手し得た筈である。そのことを明瞭に示す記述は後に示す)。いづれにしても、一二四二年當時で張特立は六十四歳、已に老大家であつたから、一二五三年に歿するまでの前後およそ二十年の間、東平の學藝の重要な指導者たり得たのである。

なお、張特立とともに易を講じた劉肅については、彼が興定二年(李昶と同年)の詞賦進士であつたこと、また東平嚴氏のもとで行尙書省事(東平行臺のそれ)を務めたこと、のちに中央にめされ、張文謙・姚樞等とともに中統鈔の發行や典章の整備にあたつたこと、『元名臣事略』や『元史』の傳に明らかである。張特立と劉肅とは、ともに初期の東平を代表する極めて重要な人物であつた。

そして、李簡「學易記序」の記述でより注目すべきは、道學諸書の東平への流入を示す次の一節である。

僕、萊蕪に居ること二載に幾し。常時讀む所の易は止だ王輔嗣と粹言のみ。諸家の説は未だ見ず。六百日の間、粹言

を節取すること凡そ三度、前賢の説の、或いは中心に安からざる所あれば、則ちこれを思ひて夜以て日に繼ぐ。脱し得る所あれば、隨いて即ちこれを書す。他年これを讀むを待つを以て、その學の進むや否やを驗す。東平に遷るに比ひ、謬説百餘條を積む。胡安定・王荊公・南軒・晦庵・誠齋諸先生の全書、及び楊彬夫所集の五十家解・單淵所集の三十家解を得てこれを讀むに及び、謬説、暗に前賢と相い合する者、十に二三あり。私心、始めて頗か自から信ず。今、卷中の凡そ名字なき者は、兼ねて諸人の意を採り、合して一説と爲すを以て、主名する能わざるなり。亦た或いは、區區管見の、輒ち自から揆らずその閒に廁る者あり。己未の歲（一二五九）、乏しきを承けて泰安に倅たり。山城事少なし。遂に向に集めし所の「學易記」を取りて、重ねて去取を加え、これを梓に付す。譽を獲るも謗を獲るも、皆この書に由る。他日、必ずや能くこれを辨ずる者あらん。時に中統建元庚申の歲（一二六〇）なり。

つまり、李簡は、東平に移居した一二四二年から泰安に官した一二五九年までの閒、二年ほど萊蕪に出ていたが、再度東平にもどつた折には、そこで胡安定（胡瑗）・王荊公（王安石）・南軒（張栻）・晦庵（朱熹）・誠齋（楊萬里）等の全書を手しているのである。このことは明らかに、それらの書物がこの二年前後の閒に東平に流入したことを意味する。また、この時に流入した書物の中には、『程氏易傳』も必ずや含まれた筈であり、これには多少の關連記事がある。その第一は、姚燧「中書左丞姚文獻公神道碑」（『元文類』卷六十）、すなわち姚樞の傳である。この神道碑には、一二四一年から一二五〇年頃までに關わる姚樞の事跡として、次のような記述がある。

自から小學書・語孟の或問・家禮を版す。楊中書（楊惟中）をして四書を版せしめ、田和卿尙書（？）をして聲詩折衷・易の程傳・書の蔡傳・春秋の胡傳を版せしむこと、皆燕に於いてす。また、小學書の流布すること未だ廣からざるを以て、弟子楊古（？）をして沈氏活版となさしめ、近思錄・東萊經史論說諸書を與え、これを四方に散ぜしむ。

すなわち、姚樞・楊惟中等は、朱子學その他の經史の解、並びに小學書等を燕京に於いて出版し、それを四方に傳えたというのである。李簡が入手した朱熹・胡安定の書とは、これら姚樞・楊惟中の出版にかかるものが、恐らく、少なからず

含まれたに違いない。

また、楊弘道「送趙仁甫序」（『小亨集』卷六）には、次のような記述もある。

（趙仁甫）その聞く所を撰して書と爲し、これを刻し、目して「伊洛發揮」と曰う。印數百本、これを載せて南遊し、その道は趙・魏・東平に達して、遂に四方に達す。

ここにいう趙仁甫が、姚樞・許衡・竇默等に程朱の學を傳えた南冠趙復であること、言うまでもない。その趙復は、恐らく燕京で印行した自著「伊洛發揮」を攜えて南遊し、東平にも一時流寓したのである（楊弘道のもとに立寄ったのは、恐らくその歸途であろう）。その歳を、楊弘道は「著雍涪灘（戊申）十有一月」と記述しているから、實に一二四八年のことであった。彼が攜えた書物がこの他にあったか否か明記されていないが、「伊洛發揮」は姚樞等の出版にかかるものだった筈だから、同じく姚樞等が出版した道學諸書も、この前後に、東平に流入したと見てよいのではあるまいか。或いは、趙復自らがそれらの書物を攜えたのかもしれない。

また、郝經「朱文公詩傳序」（文集卷三十）は、朱熹『詩集傳』の善本が大行臺尙書田侯（姚樞の神道碑にいう田和卿尙書と同一人かもしれない）の盡力によって出版されたことを言うものだが、郝經が中統以後宋に使したことを考慮に入れるならば、この『詩集傳』の出版も、恐らくは中統以前にかかるものであった。李簡等の入手した書籍の中には、姚樞等の手になるもののみならず、こうした『詩集傳』・趙復が東平を訪れた折の手抄本を含み得た筈である。東平は、嚴實が歿して（一二四〇）十數年のうちに、次々に新しい書籍・學問を経験することになったのである。

三二一

○ 李昶・王磐・李楨

23 東平に程朱の著書がもたらされるや、當地の學藝は、これら新しい學問に少なからぬ影響を受けざるを得なかった。た

たとえば、孫復「春秋發微」を家學として學んだ李昶は、これら程朱の著書を手するとただちに自説と照合し、李簡等と同じ作業（つまり諸家の學説を取捨選擇すること）にとりかかったと思われる。

昶、嘗て春秋諸家の説を集め、これを折中す。春秋左氏遺意二十卷という。早年、語・孟を讀むに、先儒の失を見て、考訂して成編す。朱氏・張氏の解を得るに及び、往々照合す。その書、遂に復た出さず。獨り孟子の舊説と新説の矛盾する者を取るのみ。參考して一に歸し、附すに己の見を以てす。孟子權衡遺説五卷となす。（『元史』卷一百六十）

李昶が編輯した春秋遺意は、あくまで左氏傳に關わるもののみであつたかもしれない。が、彼が参照した諸家の説の中には、右の文章から見て、胡瑗「春秋胡傳」や呂祖謙「東萊春秋」・また胡安國「春秋傳」といった書物が必ずや含まれた筈である。また、彼が春秋・論語・孟子の諸説を照合した時期も、道學の流入過程から見て、李簡等が易の照合を行ったのと、恐らく同時期であつたろう。そして、李昶が論語についての自説の展開をあきらめ、孟子も「權衡遺説」としてしか著書を上梓し得なかつたとすれば、それはある意味で、彼が程朱の學にかなり傾倒したことを意味し得るだろう。またそれは、逆の立場からいえば、東學の敗北宣言に他ならなかつた。金朝一代を通じ山東に残存した孫復・石介の傳統が李昶を以て幕を閉じるとは、この意味なのである。

また、この時期の東平を概観する上で忘れてならない事件は、もちろん、一二五五年に東平府學が再建されたことである。再建當初の教授の陣容は、元好問「東平府新學記」に梁棟・王磐・康暉等三人の名がある他に、『元名臣事略』卷十一商挺の條に、

康暉、書を説き、李昶、春秋を説き、李楨、大學を説く。

という記述がある。つまり、李昶は、東平府學の教學に當初から參畫していたのである。また、『元名臣事略』卷十二李昶の條は、

嗣公（嚴忠濟）……公（李昶）を師席と爲し、躬から僚屬を率いて經傳を問う。

と述べるが、この記述が一二五五年の東平府學再建前後をもし言うものであれば、嚴氏みずからが經傳を問う謂わば經筵講官の如き役割にあつたのだから、李昶は、東平の教學全般を託されたことにもなるであろう。李昶が東平に於いて極めて大きな存在であつたことは、一二五九年、鄂州にむかう途上のフビライが濮州に駐屯した折、宋子貞・李昶の二人に會見したことに明らかなである。その李昶が、この頃からもし道學に傾倒していたとすれば、府學の學風も、恐らく程朱の學を一つの大きな柱としたに違いない。

因みに云えば、教授の一人王磐も、遅くともこの頃には程朱の書入手し、その學に傾倒していたと推測される。彼について、『元名臣事略』卷十二が、

程朱性理の書を日夕玩味し、手は卷を釋[※]かず。老いて彌々篤し。

と記述するからであり、遅くともというのは、金朝時代の彼の師が麻九疇という人物であつて、その麻九疇について、郝經「太極書院記」(文集卷二十六)が、

金源氏の衰えるや、その書(程朱等道學諸書)浸淫して北す。趙丞旨秉文・麻徵君九疇、始めて聞きてこれを知る。是に於いて、自ら稱して道學門弟子と爲す。

と記述するからである。王磐は、すでに金朝末には、『四書集註』程度の書物は目睹し得たかもしれない。また、教授の一人李楨の説いた「大學」も、この場合、朱子の註による「大學」であつた可能性を多分にもつてであろう。というのは、『金史』選舉志一は、經傳の依据すべきものをあげて「禮記は孔穎達の疏を用いる」と記述する如く、金朝は一代を通じて「大學」を獨立して尊重することがなかつたからである。金朝で「大學」の註解をはじめて著わしたのは恐らく趙秉文であつたが、(そして恐らく彼のみである)、趙秉文とは、前掲の郝經「太極書院記」に明らかなように、朱子の『大學章句』乃至『或問』を目睹し得た人物の一人であつた。そのことはつまり、華北に於ける「大學」の尊重が、朱子學北傳とともに生まれたことを推測させるものであらう。とすれば、東平府學で「大學」が講じられたことそれ自體、東平に於ける程

朱の學の尊重を意味するものと見て、恐らく大過ないのである。

なお、この李楨という人物は、楊奐「東遊記」に登場する亳社の李禎周卿・すなわち元好問「別李周卿」詩（文集卷二）の李禎であつて、李楨幹臣とする『宋元學案補遺』⁽²³⁾はあやまりである。また、その他の梁棟・康曄については、その學問を考へる手掛りを缺く。

また、蛇足としてもう一つ附け加えておくならば、この時期の東平と關わりをもつた程朱の徒には、楊奐と郝經という二人の著名人がいる。楊奐⁽²⁴⁾とは、華北に於いて最も早く正統論を展開したことで知られる人物だが、この人が一二五二年に東平を訪れ、幕府の李簡・李禎⁽²⁵⁾といった人々と酒をくみ交したことは已に述べた。一方郝經は、一二五五年の八月⁽²⁶⁾、すなわち府學の始業式の折に東平を訪れているのであつて、恐らくは、行臺公嚴氏が四方から招いた宿儒の中の一人だったのである。彼が府學の始業式に招かれたことは、東平に於ける道學の尊重を何がしか感じさせるものであり、その類推からいえば、嚴氏の招いた來客の中には、その他趙復なども含まれたかもしれない。

三一三

ところで、李昶が東平の教學を託された經緯については、『元名臣事略』卷十二李昶の條に次のような記述がある。

平章宋公（宋子貞）時に幕長に居る。議論、率ね與に合せず。府政の得失・民生の利病の若き、屢々嗣公（嚴忠濟）の爲にこれを言えど、居ること數歲、同列の者と趨向を同じくせず。移疾して去るを求む。たまたま教授君の憂（父李世弼の死）に丁う。即ち門を杜して出でず。服除け、嗣公、幕僚を以て相い屈するを欲せず。公（李昶）を師席と爲し、躬から僚屬を率いて經傳を問う。

ここにいう宋子貞と李昶の對立は、實は、意外に大きな意味をもち得る。

宋子貞という人物は、『元史』の傳に、

實（嚴實）卒して子の忠濟爵を襲うや、尤も子貞を敬す。

というように、嗣公嚴忠濟の信任を一身にあつめた人である。この人の學問についてはあまり多くを知り得ないが、『元名臣事略』卷十の傳に、

資は敏悟、學は夙習の如し。弱冠にして文賦に工。

といい、元好問「鳩水集（宋子貞の文集）引」（文集卷三十六）に、

某、不敏にして以て詩文の正脉を知るに足らざるも、嘗て試みに、妄りにこれを論ず。文章は眞積の力に出ずと雖も、然れども、父兄淵源・師友講習・國家の教養あらざれば、能く卓然として自立する者鮮し。……宋君、太行に起ち、その經明行修は、蓋し故家の遺俗なり。

と記述する所から見ると、なによりも先ず、科擧の學としての「詞賦」に優れた人であつたろう（元好問のいう「父兄淵源・師友講習・國家教養」が、家學・學校・科擧を指すこと、無論であるが、彼はこの語を、同文の中で科擧の重要性と宋子貞の學風を説くために用いている。そのことはつまり、宋子貞が文學の人でなく科擧の人だつたことを端的に示すが、元好問は、同様の表現を「内相文獻楊公（雲翼）神道碑」へ文集卷十八の中で用いており、彼獨特の人物評・乃至微辭として、極めて興味深い）。

ところが李昶は、嗣公嚴忠濟を諫めて、

比年、内外に裘馬を相い尚び、飲宴して度なく、庫藏は空虚となり、百姓は匱乏せり。もし、猶お故常を循習せば、恐るらくは、或いは變を生じん。惟だ閣下は、正士を接納し、小人を黜遠し、浮華を去り、樸素を教くし、騎従を損し、宴遊を省けば、已然の失は救う能わずと雖も、尙お以て未然の禍は弭む可し。（『元史』李昶傳）

と述べたというから、多分に道學臭を有した人であつた。しかも、右の文に李昶という小人は、前掲『元名臣事略』李昶傳を對照するならば、宋子貞とそのグループを指したこと、何ら論をまつものでない。とすれば、李昶に學問の重責を託した嚴忠濟の處置とは、實質的には、東平行臺の政治の中樞から李昶を除外するためのものであつた可能性を、多分に有

することになるのである。

東平には、行臺公嚴氏をめぐって、恐らく二つのグループの對立があつた。そのことが最も端的に示されているのは、實は中統二年（二六二）に嚴忠濟が管民總管兼行軍萬戶の職を解かれた折の經緯ではないか。というのは、嚴忠濟の過失を告發したのが彼の弟（恐らく嚴忠嗣）であつたこと、王惲「中堂事記」に明らかであるが、その時に兄忠濟の職を襲つた忠範が最初に行ったのは、中統政府發足以來中央にあつた李昶を東平に召還し、彼に師事することだからである。

『元史』李昶傳は次のようにいう。

たまたま嚴忠濟罷め、その弟の忠範を以てこれに代う。忠範、表して昶を請い、これに師事す。特に翰林侍講學士・行東平路總管軍民同議官を授けらる。昶、十二事を條し、宿弊を剷除す。

つまりこのことは、東平にあつた忠濟・宋子貞の影響力と宿弊を、逆の立場にあつた李昶の力をもって、忠範が一掃しようとしたことを意味し得るのである。また、「中堂事記」によれば、忠濟解任から李昶の歸郷まで、わずか八日の出來事であり、忠範にとって李昶召還が豫定の行動だつたことは明らかなのである。因みにこの時宋子貞は、右三部尙書としてやはり燕京にあつたが、王文統の私第で行われた李昶・忠範の送別の宴に、姚樞・竇默・張德輝・王鶚等とともに出席しているのである。宋子貞が、金朝「詞賦」の傳統の繼承者であつたとするならば、李昶は恐らく、東平に於ける新しい學問の領袖だつたに違いない。

また、蘇天爵「耶律文正公（有尚）神道碑銘」（文集卷七）に、

是の時に當り、齊魯の人士は金の辭賦の餘習を踵ぎ、章を飾り句を繪るを以て相い高る。公、これを厭薄し、専ら經を明らめ人に訓ず。

という記述がある。この記述は、元初の東平の學風を示すものとして、時に引用されてきたものだが、ここにいう「齊魯の人士は金の辭賦の餘習を踵ぐ」も、東平全體の學風を指すのではなく、もっぱら宋子貞とそのグループを指すものでな

かつたろうか。耶律有尚が許衡を訪ねた頃とは、宋子貞が最も政治力を有した時代であり、東平が金朝風の禮樂の整備に意を注いだ頃なのである。その上、「詞賦」を浮華の習として極度に嫌惡する風は、道學の歴史の中でも、姚燧以後に屬することであつた。記述者蘇天爵は、自身の價值觀を以てあまりに當時を律しすぎたのではあるまいか。

三一四

また、東平と程朱の徒との關わりを示す記述は、更に幾つか提出することが可能である。

○ 胡祇適

その第一は、胡紫山（祇適・字は紹開）である。この人は、劉賡「胡紫山大全集序」に、

公、未だ冠するに及ばずして、便ち能く諸生に従いて習いて程文（この場合は「詞賦」）を爲すも、好む所にあらざるなり。潛かに伊洛の學に心す。

と記述し、『四庫全書總目提要』に、

詩文は……また雕飾する所無し。惟だ理明詞達を以て主と爲す。

というように、道學に傾倒し、詩文の雕飾を嫌つた人であつたが、この人と東平諸士とがいかに深く結び附いていたかは、劉賡の序にいう次の文章によって證し得る。

嗚呼、賡は常て鹿庵先生（王磐）に師事す。先生、告^こいて東平に還るを得。諸生（王磐の門人）を^す前めて公（胡紫山）に謂いて曰く、「敢て、是の數諸生を以て紹開（胡紫山）を累^{たま}わさん」と。且にこれをして羅拜せしめんとす。公、これを避く。鹿庵、良や久しくして曰く、「師友の閒を以て公を待さん」と。公、遂にこれを諾す。

つまり、記述者の劉賡は、東平府學教授であつた王磐の門人であり、胡紫山その人も、それら王磐・劉賡と師友の閒柄であつた。また、同文は次のようにもいう。

野斎（李謙）・秋澗（王惲）の撰する所の神道碑・祠堂記あり。

ここにいう李謙とは、實は李昶の高弟であり、一時は東平府學の教授をつとめ、後に裕宗眞金（28）のもとで太子左諭德になつた人である（王惲の祠堂記は現存するが、神道碑は殘念ながら残っていない）。紫山と李謙の交遊は、紫山の詩（29）によつても一斑はうかがい得るが、こうした神道碑や詩の存在は、東平の人々と彼との立場の近さを物語ると同時に、東平の學問が紫山の好まなかつた「程文（詞賦）」のみでなかつたことを端的に示しているのである。

また、胡紫山は、李昶に對しても何らかの共感・敬意をいだいていたに違いない。というのは、『紫山先生大全集』卷十二「上李尙書書」とは、李昶その人に宛てた手紙に他ならないからである。當時の選舉の不備を歎くこの手紙は、李昶が禮部尙書として至元五年に「選舉禮文の事」を裁定した折に書かれたものと推測されるが、李昶に對し批判的な内容を何ら含まない點から見て、胡紫山の彼に對する期待と敬意が書かせたものだったのである。

○ 李謙

また、東平の人々と程朱の徒のかかわりを示す第二は、李昶の高弟李謙自身である。この人が、眞金（29）の太子左諭德となつたことは已に述べたが、この時眞金に近侍したのが王恂・耶律有尚といった程朱の徒であり、また、李謙とともに名儒として推薦された人物に劉因がいたことは、この人の學問がそれら程朱の學と無關係でなかつたことを、濃厚に感じさせるものである。『元史』李謙傳は、この人の文章を論じて「浮巧を尙ばず」というから、「詞賦」の遺風のみを繼承した人では、少なくともなかつたろう。しかもこの人は、劉因『靜修文集』の序を書き、張文謙・王磐・寶默・李昶等の神道碑・墓誌を書いた人でもあつた。この張文謙が、許衡の學問に傾倒し、姚樞・寶默等とともに國子學の復興に盡力した人であつたこと、また寶默も、姚樞・許衡とともに程朱の學を學んだこと、あまりにも有名な逸話であらう（なお、寶默の墓誌は李謙撰であるが、神道碑は、やはり東平の人であつた王磐の手になる）。つまり二人は、ともに姚樞・許衡と深くかわつた人物であつたが、その二人の神道碑と墓誌を、李謙は、彼の師友王磐・李昶・胡紫山等のそれとともに撰述しているの

である。更に、李謙の門人の一人曹伯啓は、京兆に許衡の祠堂を初めて建立した人でもあった。⁽³¹⁾また、李謙とは必ずしも関係ないが、『元文類』卷十八「魯齋先生（許衡）畫像贊」とは王磐の撰述になるものであったし、東平の劉肅・李簡といった人々が張文謙・姚樞等とともに仕事をしたこと、すでに述べた通りである。こうした事柄は、姚樞グループと東平の人々とが必ずしも疎遠でなかったばかりか、かなりの援點をもっていたことを端的に示すであらう。現にまた、『元史』世祖本紀中統二年九月戊辰の條は、

大司農姚樞……東平府詳議官王鏞を、兼ねて禮樂提舉に充てんことを請う。詔して……鏞を以て特に太常少卿を兼ねしむ。

というように、姚樞の側も東平の禮樂にかなりの影響力をもっていたのである。李謙が張文謙・竇默の墓誌を撰述したのも、決して偶然ではなかった。

○ 王旭

また、東平と程朱の學との關わりを示す第三は、東平に學んだと推測される王旭という人物である。この人は、『蘭軒集』十六卷を傳えるのみで、經歷は明らかでないが、自から東平王旭と記述する所から、東平の人だったことが判ること、⁽³²⁾文集集中に王構・夾谷之奇・閔復・馬紹等の府學出身者が多數、それもしばしば登場すること、更に、東平の王構・王磐とともに「三王」と稱されたことなどによって、恐らく東平府學の出身者でなかったかと推測される。この人は、『蘭軒集』を一讀すれば明らかな如く、程朱の學を奉じた人であったが、そのことが最も端的に示されているのは、「上許魯齋先生（衡）書」（『元文類』卷三十七）という次の一文であらう。

三月朔日、東平晚進の王旭、謹んで齋沐して書を裁め、頓首百拜して左丞先生閣下に獻ず。……國家、天下を有してより六十餘年、文風振わず士氣は卑陋、學者は雕蟲の舊を踵ぐに過ぎざるのみ。閒に一二の伊洛の學に心を留め、志を高遠の地に立てる者あり。衆は且つ群咻してこれを聚笑し、以て狂となし怪となし妄となす。而も且つ、以て時に

背く枯槁無能の人と爲すなり。嗚呼、儒學は豈に眞に無用の具ならんや。正道は明らかならず、士は誑僻に習い、以て斯に至るは歎かわしと謂う可きのみ。……然りと雖ども、僕は固より聖賢を以て先生を望み、世俗の待つ所以の者を以て先生を待つにあらざるに、則ち猶お、疑い無き能わざるは何ぞや。……（先生は）何如ぞ、蘇門の故隱に返り、西山の白雲に臥し、遠くは洙泗の微言を續ぎ、近くは伊洛の正派を考え、聖傳をして墜ちざらしめ、後學をして歸す有らしめん。

この手紙は、要するに、程朱の徒許衡に對し、政治の渦中から身をひき、郷里に隱棲して學問にのみ生涯をささげるべきことを説くものである。王旭という人は、江南を歴遊した後、山東で子弟を教育しながら、學問に一生を捧げた人のようだから、姚樞の政治力を背景に中央に深く關與した許衡にこのような手紙を宛てたことは、ある意味で當然だったかもしれない。また、文中に「學者は雕蟲の舊を踵ぐに過ぎざるのみ」というように、當時、眞に程朱の徒といえる人物は數える程しかいなかったであろう。その點では山東も例外ではあるまいが、ただ、彼が程朱の徒を以て任じたことは、この手紙に明らかであり、また、彼がどこで程朱の學を學んだかといえ、それは恐らく元初の山東に於いてしかなかった筈である。山東が新しい學問の一翼を擔ったことは、この一事を以てしても是認せられてよい事柄であろう。

四 元代の泰安

さて、最後に、元朝時代の泰安について多少觸れておきたい。

この地の學問は、東平の李簡・王旭といった人々が一時住んだこと以外、あまり多くは知り得ないが、ただ、泰安州學・泰山書院・兩先生祠堂のその後の消息については多少知り得るので、そのことを簡単に述べておく。

まず泰安州學は、金末元初の混亂の中でも建物は残ったらしく、その重修作業が至元八年（一二七一）、東平府學に遅れること十七年後にはじめられている。その時の重修廟記が『泰安縣志』（前掲）卷六の中に收められているので、一部紹

介する。なお、撰者は東平の李謙である。

（州の廟學）兵亂に遭罹するも幸いにして完存す。然れども、歲月^{ますます}滋々久しくして風雨を蔽う能わず。將に壓覆の患あらんとするも、累^{しほ}りに前政を易^かえ、未だ茸くに暇あらず。至元辛未（一二七一）に逮び、洛州防禦使馬驤、來りて是の州に尹たりて事を視る。初め、先聖に謁^{いた}りて廟貌を顧瞻^{かえりみ}る。退きて嘆じて曰く、「事、此れより急なる者あらんや」と。乃ち慨然として興作の志あり。

この文章の末尾には、次のような一節がある。

泰山は聖人の郷。郡は洙泗（孔孟の故郷）を去ること纔^{わず}かに百有餘里。人は儒術を好み、戸ごとに讀書を知る。今、學成り教を擧ぐ。當に、通經學古の士の泰山徂徠（孫復・石介）二先生の如き者有りて焉^{これ}より出づるべし。

同文中には、州學教授王禎と門人劉琛の名が見え、この二人は、或いは東學の傳統を傳えた人達だったかもしれないが、「通經學古の士の泰山徂徠二先生の如き者有りてこれよりいづるべし」という表現からすれば、その傳統も、もし殘存していたとしても、氣息奄奄たる狀況であつたらう。

なお、この泰安州學は、後の至正二年（一三四二）にもう一度重修されることになる。その折の重修記は現存しないが、直後の至正九年に書かれた「泰安州修學塑七十子像記」⁽³³⁾は現存しており、後の泰安の狀況を多少うかがうことが可能である。

嗚呼、他日、岱陽の文風は丕^おいに變じ、人材は衆^お多くして、昔の泰山孫氏・徂徠石氏・党氏（懷英）の若きものを輩出せん。

これは至正年間⁽³⁴⁾の狀況を云うもので、元初の泰安ではない。が、泰安の衰退は他日を期すまでに至っており、依然として孫復・石介・党懷英しか言及し得ない文風の衰弱は覆うべくもなかったのである。

この間の魯兩先生祠堂も、恐らく同様の狀況にあつた。というのは、明の成化年間に書かれた吳寛の祠堂記（『泰安縣

志』卷七)は、次のように記述するからである。

祠は、始め今の泰安州治の西に建てられ、嶽廟に鄰す。金源時、遂に廟に併せらる。元は改めて嶽麓に建てるも、已にして復た浮屠氏の據る所となる。

元の時代に建てられた祠堂とは何をいうのか詳らかでないが、そこも僧侶達に占據されたというのだから、春秋二仲の祭りを元一代保ち得なかったことは明らかである。こうした状況の中で、孫復・石介の學問が組織だつて保たれた筈はまずない。かりに、一時は祠堂が再建され、その折に東學の復權が計られたとしても、それがほとんど勢力をもち得なかったこと、後の歴史の示す通りであろう。

また、泰山書院の興廢も、清朝康熙年間に書かれた趙國麟の次の記述以外、ほとんど知り得ない。

金元に迫びて以來、數々遷徙有りて廢興常ならず。則ち、泰山書院の名は存すと雖も、當年の遺蹟は已に復た識る可からず。(『泰安縣志』卷六)

ただ、東平王旭『蘭軒集』の中に、「孫泰山書院故基詩」と題される詩が三首ほど收められており(卷二と卷四)、その詩によつてこの書院のその後を多少知ることが可能である。この三首は、ともに日付がないが、『蘭軒集』全體の日附を勘案すれば、およそ至元末から大徳の頃の作とすることが可能なものではあるまいか。

魯史成書自聖人 魯史 書と成るは聖人に自る

當時三傳已紛紜 當時 三傳 已に紛紜

窮經歷代非無士 經を窮めるは 歷代 士なきにあらざるも

立義尊王獨有君 立義尊王 獨り君あるのみ

遊客偶來觀故迹 遊客偶々來りて故迹を觀る

後賢誰與繼斯文 後賢誰とともにか斯文を繼がん

鐘魚聲起絃歌斷 鐘魚の聲起ち 絃歌斷たれ

落日空山愁白雲 落日空山 白雲に愁う

王旭という人は、東平の李昶と同様、東學の傳統に導かれて程朱の學を學んだ人だったかもしれない。少なくとも、この詩に見られる孫復への傾倒は、そのことを濃厚に感じさせるであろう。そして、この詩に「鐘魚の聲」という如く、泰山書院もやはり僧侶の據る所となっていたのである。釋老をあれ程排斥したのが石介であったことを思うならば、なんとも皮肉な話といわざるを得ない。それがいつ頃からかは無論不明ではあるが、金末元初の混亂以來、恐らく一貫してそうだったのであり、二百年來續いた東學の傳統は、今日は全く顧みられない王旭の如き無名詩人が、時に當地を訪れ、感慨にふける程度にしか、回顧されなかったのである。

邇來二百年 邇來二百年

何人繼其跡 何人かその跡を繼がん

故居雖未毀 故居 未だ毀^{こぼ}たれずと雖も

見者爲嘆息 見る者 爲に嘆息す

天寒孤鳳去 天寒く孤鳳去り

日暮群鳥集 日暮れて群鳥集^あう

回首瞻泰山 首を回らして泰山を瞻^みれば

巖巖自寒碧 巖巖自ずから寒碧

こう述べて、王旭が時の推移を嘆いたのは、東學が已に衰退の極にあつたからであろう。

註

- (1) 『山左金石志』卷十六、富弼撰「鄆州新學記」に、その時の事情は詳しい。
- (2) 『宋元學案補遺』卷二「龔東原先生鼎臣」の條參照。
- (3) 歐陽修「孫明復先生墓誌銘」參照。
- (4) 『宋史』「選舉志」三・『金石萃編』卷一百四十六「大觀聖作碑四種」・『山左金石志』卷十七等、參照。
- (5) 『山左金石志』卷十八參照。
- (6) 『宋元學案補遺』卷二「姜氏續傳」參照。
- (7) 拙稿「元好問『論詩三十首』とその周邊」（日本中國學會報第三十七集所收）參照。
- (8) 『泰安縣志』は乾隆四十七年のものと道光八年のものとは二種あるが、内容は同じである。
- (9) 岱廟擴張の時期は明らかでない。『金石萃編』卷一百四十七には「宣和重修東岳廟碑（宣和三年）」があるが、恐らくそれ以前のことであろう。
- (10) 『金詩紀事』卷四楊用道の條參照。『金詩紀事』は、楊用道の詩碑の拓本を入手していたようであり、次の一文を引く。「用道、長山（淄州）の人、仕えて中奉大夫に至る。……石刻の拓本は、王國器、『楊用道懷范樓詩』に跋す。故海寧刺史楊中奉の才學、蘇黃と上下し、李舜臣に近し。家に公の筆跡を得。その湮沒を慮り、工に命じて石に勒み、以て永久に傳う。泰和乙丑□□日、宣武將軍行主簿騎都尉王國器立石」。なお、耿昌世については、関連資料をまだ見ない。
- (11) 文登縣學・章丘縣學・博州州學・棣州州學、いづれも『山左金石志』卷十九・卷二十參照。
- (12) 『山左金石志』の案語は、遺山集「閑閑公墓銘」中の「次は衛州行部郎中石玠に嫁ぐ」を引く。ただし、金史に登場する石玠は、この人物のみではない。
- (13) 『溇南遺老集』卷三「論語辨惑序」・及び、蘇天爵「默菴先生安君行狀」（文集卷二十二）參照。ただし、王若虛が朱子を批判したのは、南人に對する特殊な感情も無論含まれたであろう。
- (14) 上述の人物の作品は、『中州集』に收録される詩を別にすれば、今日ほとんど傳わっていない。ただ、金石志や地方志の類から多少拾い得たものがあるので、左にその題名を列しておく。
- 黃久約 「節度副使張公神道碑」（前掲）
- 趙溫 「榆山王先生墓表」（前掲）・太原府學文廟碑「（山西通志）」・照公禪師塔銘」（『濟州金石志』卷三）・「陶山幽棲寺重修大殿記」（『八瓊室金石補正』卷一百二十五）
- 王去非 「博州重修廟學記」（前掲）・「平陰縣城西清涼院記」（『八瓊室金石補正』卷一百二十五）
- 李守純 「泰安縣重修宣聖廟記」（前掲）
- 周馳 「靈巖寺田園記」（前掲）
- 党懷英 「十方靈巖寺記」（『金石萃編』卷一百五十七）・「大金重修至聖文宣王廟碑」（『金石萃編』卷一百五十七）・「大金故醇德王先生墓表」（前掲）・「棣州重修廟學碑」（前掲）・「檀特山建釋迦殿記」（『八瓊室金石補正』

- 卷一百二十五)・(谷山寺記)〔泰安府志〕卷二十五)・(重修天封寺記)〔泰安府志〕卷二十五)・(魯兩先生祠堂記)〔前掲〕・(重建鄆國夫人殿記)〔孔氏祖庭廣記〕卷七)・(故贈正奉大夫襲封衍聖公孔公墓表)〔孔氏祖庭廣記〕卷七)・(昭公和尚開堂疏碑)〔濟州金石志〕卷三)
- (15) 安部健夫氏『元代史の研究』・および孫克寬氏『元代漢文化之活動』参照。
- (16) 『歸潛志』卷八「金朝取士」の條、並びに卷十「泰和大安以來」の條参照。
- (17) 元好問「趙閑閑眞贊」(文集卷三十八) 参照。
- (18) 李俊民がいつ程氏の書を手に入れたかについては、郝經「宋兩先生(二程)祠堂記」(文集卷二十七)の中に、「泰和中(一一〇一)〜一二〇八、鶴鳴先生俊民、先生の傳文を得」という記述がある。この時李俊民が入手した傳文が何か明記されていないが、『大易粹言』の如き集解本であった可能性はかなり高いだろう。また、張特立が初めて程氏の學を知ったのも、或いはこの頃だったかもしれない。
- (19) 『四庫全書總目提要』参照。
- (20) 『元史』「世祖本紀」一、歲己未夏五月の條参照。
- (21) 『元名臣事略』卷十二王磐の條参照。
- (22) 孫德謙『金史藝文略』参照。
- (23) 卷九十「魯齋學案」嚴氏師承の條。
- (24) この人の學問については、『宋元學案』卷九十「魯齋學案」参照。
- (25) 楊奐「正統八例總序」(『元文類』卷三十二) 参照。
- (26) 郝經「去魯記」(文集卷二十六)に、「乙卯(一二五五)の秋、始めて東行するを得。……八月に東原に入る」とある。東原は東平の古名。
- (27) 元好問「東平府新學記」に、「乙卯の六月初五に落成し……乃ち八月丁卯、侯、寮屬諸生を率いて新宮に舍榮す」とある。
- (28) 『元史』李昶傳参照。なお、李昶の墓碑は李謙の撰述による。
- (29) 『紫山先生大全集』卷五「寄李受益應奉」 参照。
- (30) 『廣平府志』卷八 参照。
- (31) 『滋溪文稿』卷十「御史中丞曹文貞公祠堂碑銘」 参照。
- (32) 卷七には「二月二十七日、鄆城より東平に還り拜掃する途中の作」という詩もある。
- (33) この張從仁「泰安州修學塑七十子像記」は、金石志や地方志の類に全文を收録するものを知らない。この碑石は、泰安市岱廟内に現存しており、ここに示した文章も、かつて同地を訪れた折に筆寫してきたものである。誤寫のないかを恐れる。

THE DESCENDANTS OF THE TAIAN 泰安 SCHOOL

TAKAHASHI Bunji

Sun Fu 孫復 and Shi Jie 石介, who laid the foundations of Song 宋 learning, were active during the Northern Song in Shandong 山東, primarily in Taian 泰安. Their teachings, sustained by a mixture of their disciples' propagation and Shandong people's regional loyalty, continued to flourish for the next two hundred years, especially in Taian and Dongping 東平. During the Jin 金 period, from Dongping issued forth the famous Liu 劉 lineage, Huang Jiuyue 黃久約, and the father and son Zhao Que 趙慤 and Zhao Feng 趙颯; from Taian, Tang Huaiying 党懷英 and the Shi 石 family, and from Pingyin 平陰, Wang Qufei 王去非, Wang Quzhi 王去執, and Wang Chongyuan 王仲元. These disciples and others sustained the tradition of Sun Fu and Shi Jie. Moreover, the Dongping Prefectural School, the Taishan 泰山 Academy, and the Taian Prefectural School all may have played a role in maintaining the scholarly tradition of Song learning. The Sun Fu-Shi Jie tradition dwindled to an end in the person of Li Chang 李昶. Sun Fu's *chunqiu* 春秋 learning had been transmitted by Li Chang's family and transmitted to him, but, at the beginning of the Yuan 元, he fell under the sway of the teachings of the two Chengs 二程 and Zhu Xi 朱熹.

It is generally thought that most of the scholarship of the early Yuan in Dongping continued the Jin tradition of studying *ci* 詞 and *fu* 賦. However, this view is nothing more than the product of the group surrounding Song Zizhen's 宋子貞 temporarily gaining sway. Simultaneous with this development, the teachings of the Cheng brothers and Zhu Xi steadily penetrated Shandong. Thinkers who embody this trend are, before the rebuilding of the Dongping Prefectural School, Zhang Teli 張特立, Li Jian 李簡, and Liu Su 劉肅; and at the time of the rebuilding, Li Chang, Wang Pan 王磐, and Li Zhen 李禎; and afterwards Li Qian 李兼, Wang Xu 王旭 and others. Moreover, at this juncture, the Taishan Academy